

# 4 農業・農村振興とコンパクトなまちづくり

研究員 植木 千恵

私は、「農業・農村振興とコンパクトなまちづくり」をテーマにお話したいと思います。

上越市は食と自然の宝庫

**食の宝庫**

- n 大水田地帯 水田面積・コメの産出額 全国第3位
- n あいしい水 日本酒の蔵元16蔵、どぶろく特区
- n 豊富な海・山の幸 中心市街地3ヶ所の朝市、地方卸売市場
- n 食文化 水産系食品加工業(かまぼこなど)、味噌、煎餅・

**自然の宝庫**

- n 雪 人の住む所での積雪日本一 816cm
- n 日本海 直江津港(物流)、漁港4ヶ所、海水浴場5ヶ所

これまでの発表者が上越市の紹介をしてきたかと思いますが、改めて振り返ってみたいと思います。

上越市は、市街地、広大な農地を有する田園地域、自然・水源豊かな中山間地域、さらに日本海といった非常にバラエティーに富んだ地域となっております。

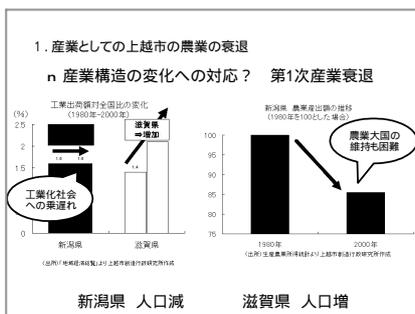
このような事から上越市は食と自然の宝庫とも言えます。例えば米の産出額が全国第3位の大水田地帯で、16の蔵元があり、海・山

の幸が豊富な地であります。また積雪日本一になったこともある非常に雪深い所でもあります。このように食と自然が豊かではありますが、農業や農村の現状を見ても非常に厳しい状態になっております。

農業や農村には多様な機能があると言われておりますが、ここでは産業としての農業、なりわいとしての農業に注目しながら農業・農村の衰退の現状と課題について分析し、報告したいと思います。またそれらを踏まえながら次の世代が農業・農村を活性化していく方向性について提案し、上越市全体への影響について述べます。

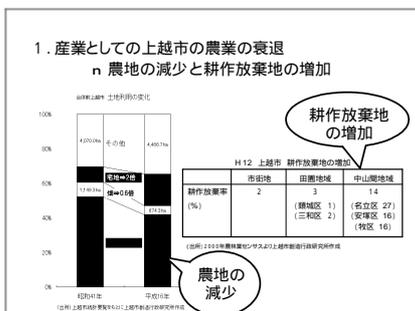
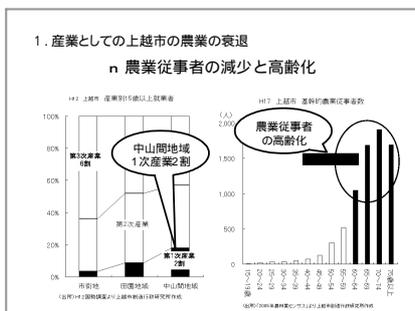
## 1. 上越市の農業・農村の衰退の現状と課題

上越市の農業・農村の衰退の現状と課題について述べたいと思います。



まず、産業構造が変化する中で農業がどのように位置づけられてきたか、新潟県と他県を比較しながら見たいと思います。こちらのグラフは、1980年と2000年の工業出荷額の対全国比をみたものです。滋賀県は過去20年間で工業産出額が増えているのに対し、新潟県は横ばいの状況となっております。こういったことから工業化社会への乗り遅れというところがみられます。一方、農業の分野でみてみますと新潟県は1980年から2000年の20年間で農業産出額が減少し

ている状況でもあり、農業大国と言われてきた新潟県でも非常に困難な状況になっております。さらにいろいろな要因から過去20年間で新潟県は人口が減少、一方で滋賀県は人口が増加しています。

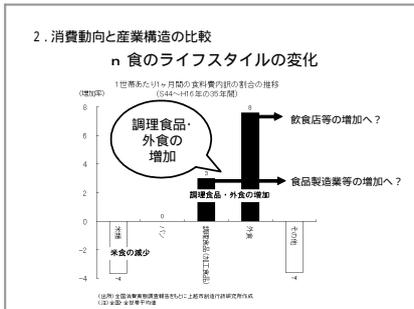


さらに上越市の農業にフォーカスしてみます。

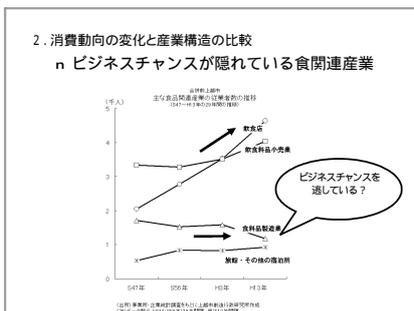
こちらは産業別就業者割合をみたものです。市街地、田園地域、中山間地域でみてみますと、中山間地域では若干第一次産業の割合が他の地域と比べて高い状況

になっています。さらに、農業従事者の年齢構成をみると、8割が60歳以上と非常に高齢化が進んでおります。(以下、簡易に市街地を合併前上越市、田園地域を柿崎区、大潟区、頸城区、清里区、三和区、中山間地域を安塚区、蒲川原区、大島区、牧区、吉川区、中郷区、板倉区、名立区とした)

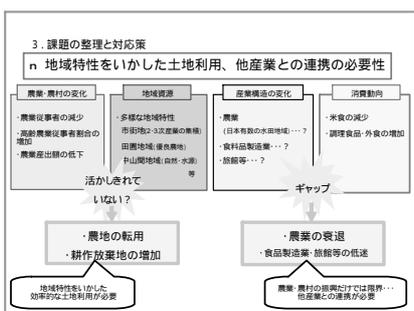
また、昭和41年と平成16年の土地利用の変化をみると、宅地が非常に増加しているのに対して、農地は非常に減少していることが分かります。また耕作放棄地は年々増加していき、特に中山間地域においては耕作放棄率が高くなっています。



ここから、消費動向と産業構造の比較をしてみたいと思います。これは全国の昭和44年から平成16年の35年間の食費の内訳割合の増減を表したものです。このように米の消費が減っており、水田大国ともいえる上越市としては非常に打撃が大きい状況になっています。また調理商品・外食が増加していて、食のライフスタイルの変化が見て取れます。



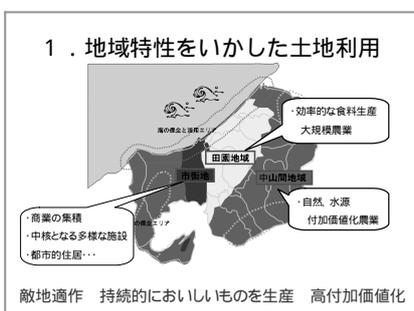
こういった消費者の変化に連動して飲食店の増加や食品製造業の発展が期待されるのですが、昭和47年から平成13年の29年間の上越市の食に関する産業の従業者数の変化をみますと、食品製造業や旅館業などは停滞している状態で、ビジネスチャンスを探しているという風にも見て取れます。



それでは、これまでの課題を整理したいと思います。上越市には多様な地域特性がありますが、一方で農業・農村は変化し、それらを生かしきれず、農地の転用や耕作放棄地の増加といった課題を抱えています。こういったことから地域特性を生かした効率的な土地利用が必要であると考えます。また消費動向が変化し、食のライフスタイルが変わっている一方で、農業や食品関係の産業がなかなかそれに対応できず、農業や食品製造業等の低迷が続いています。

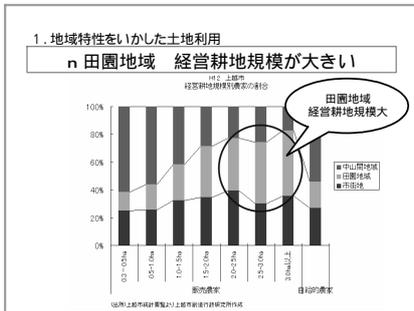
このようなことから農業・農村の振興だけでは限界があり、他産業との連携が必要であると考えます。

## 2. 上越市の農業・農村振興の方向性

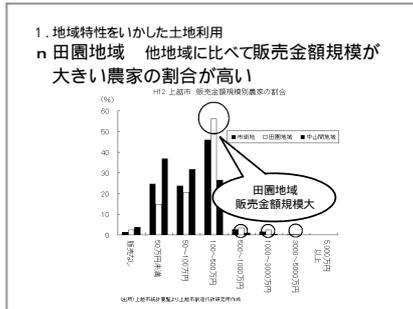
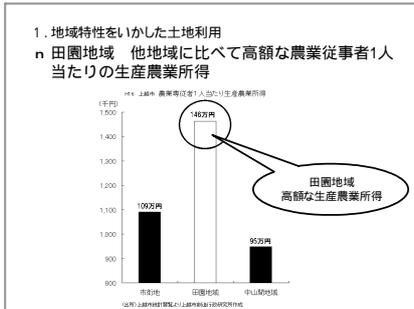


そういった現状を踏まえながら、上越市の農業・農村振興の方向性について考えていきたいです。

先ほども申しましたが改めて上越市の地域特性について振り返りたいです。上越市は、効率的な食料生産の可能性が高い田園地域があり、こういった所での大規模農業が考えられるのではないかと思います。また、中山間地域では、自然や水源豊かであり、高付加価値化農業が可能ではないかと考えます。



まず田園地域に注目して見ていきたいと思います。このグラフは、平成12年の経営耕地規模別の地域別販売農家の割合を示したものです。田園地域の経営耕地規模は他の地域に比べて非常に大きい状況となっています。



また、平成16年の田園地域の農業従事者一人当たりの生産農業所得をしてみると他の地域よりも高額です。

販売金額規模を見ても田園地域は金額が高くなっています。こうしたところから田園地域の農業の方向性としては、大規模農業をさらに推進していくことが良いのではないかと考えます。

田園地域 大規模農業  
事例 上越市三和区神田集落

- ・米の有機栽培
- ・多様な園芸作物の栽培

ポイント

- ・広大な優良農地
- ・食スタイルの変化への対応 (健康、高齢、有機栽培、環境保全型、新加工品、農産物...)
- ・他産業との連携
- ・少人数・高齢化への対応

<金谷農園>

- ・有機自然農法の導入
- ・H2特別栽培米の産地直送販売(全国へ)
- ・加工食品の加工販売

味噌・梅干、無農薬芽米等

例として上越市の田園地域に位置する三和区をご紹介したいと思います。

こちらでは米の有機栽培、多様な園芸作物の栽培を広大な優良農地を生かしながら行っています。また食スタイルの変化への対応も非常に柔軟に行っております。

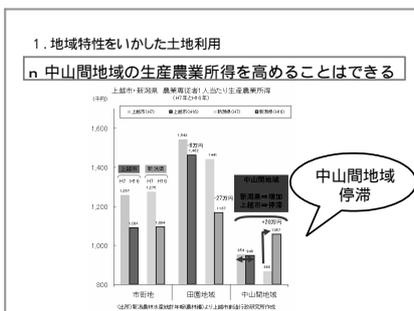
ここからは中山間地域について見てみたいと思います。



上越市の中山間地域は自然豊かで水源に恵まれております。

また、高い標高や豪雪地帯といった農業には不利な条件もありますが、多様な食材が揃う環境でもあります。例えば標高約500mの中山間地域の牧区を

例にしますと、1日の寒暖の差をうまく利用して大根を栽培しております。その地域に伝わる雪太郎伝説というの掛け合わせまして、あまくておいしい雪太郎大根ということで首都圏に販売しております。



また中山間地域の可能性として、生産農業所得を高めるとすることも可能ではないかと考えます。これは平成7年と平成16年の新潟県と上越市の生産農業所得を比べたものです。中山間地域に注目すると、新潟県は所得が増えているのに対し、上越市は停滞しています。こうしたことから方法次第では中山間地域でも生産農業所得を高めていくことが可能ではないかと思えます。中山間地域では高付加価値化農業がひとつの方法として言えるのではないのでしょうか。

中山間地域 付加価値化農業

事例 「ファーストファーム(株)」  
上越市浦川原区

設立  
平成15年9月(東頸城農業特区参入)

事業内容  
牧場、農産物加工販売(ヤギジェラート、吟醸酒)、アミルセラピー、  
里山再生・景観保全(竹の子・山菜)等

経営基本方針  
・農山村の景観・機能保全  
・自然環境保護保全型自然農法  
・生産型地産地消、付加価値の高い農業経営

ポイント  
・中山間地域の地形、自然素材  
・食スタイルの変化への対応  
・他産業との連携  
・少子・高齢化への対応

ご紹介します事例は、上越市の中山間地域に位置します浦川原区  
の例です。こちらは株式会社が農業参入して、牧場、農産物加工販  
売など非常に多角的な農業経営を行っています。このようにやり方  
しだいでは高付加価値化農業にチャレンジすることができるのでは  
ないでしょうか。

2. 2次・3次産業との連携(6次産業化)

事例 くびき野 食の宝石箱

事業内容  
頸城平野の農産物、加工食品、創作料理を集めた食関連業者を中心  
とした試食販売イベント

目的  
「農」を主体とした農業生産者、商工業者(小売・食品製造業)、消費者  
間のネットワークづくり

ポイント  
・地域資源の活用  
・食スタイルの変化への対応  
・他産業との連携  
・少子・高齢化への対応  
・6次産業化(起業・新規事業)

・豊富な食材  
・一体となっ  
た都市と農村

また第二次・三次産業との連携、六次産業化の可能性も秘めてい  
ると思います。

こちらはくびき野食の宝石箱という上越商工会議所が中心となっ  
て行っているイベントの事例です。これは地元の豊富な食材を集め  
まして、それを加工して特産品として開発したり、新規事業を立ち  
上げたりできないかネットワークづくりから始めている事例です。

ここまでいろいろな事例を紹介してきましたが、ポイントと言えることは、地域資源をうまく活  
用していくこと、それから食スタイルの変化に柔軟に対応していくこと、また他産業との連携が不可欠  
であるということです。そして今後の課題としては、少子・高齢化への対応、それからこういった取組  
が事業として実際に成り立っていくような道筋をつけていくしくみが必要だと考えています。

### 3. 農業・農村の振興による上越市全体への影響

農業都市版コンパクトシティの可能性

適地適作  
n 市街地、田園地域、中山間地域それぞれの地域特性を  
生かした農業・農村振興

消費者ニーズへの対応

他産業との連携の中での農業・農村振興  
n 上越市の経済を支える基幹産業として成長

農業都市版コンパクトシティ  
n 都市は都市らしく、農村は農村らしく  
コンパクトなまちづくり

最後に、農業・農村の振興による上越市全体への影響を考えます。

方向性のひとつとして適地適作、市街地・田園地域・中山間地域  
それぞれの地域特性を生かした農業・農村振興がこれからは重要に  
なると考えます。また地域資源を社会の変化に合わせ、そして消費  
者ニーズを意識しながら生かしていくことが必要です。それから、  
他産業との連携の中での農業・農村振興が必要になると考えます。

こういった視点から上越市の農業・農村振興を行うことは、都市  
は都市らしく、農村は農村らしくあるということでもあり、長期的にみるとコンパクトなまちづくり  
にもつながるのではないかと考えます。

なお、ここまでは産業としての農業に注目してきましたが、実際にこういった視点で進めていくう  
えでは、農業・農村が有する国土保全や生きがいづくり、文化の継承といった機能も考慮していかな  
ければならないと思います。